



東アジア・オーストラリア地域フライウェイパートナーシップ
The East Asian-Australasian Flyway Partnership(EAAFP)

国内ツル類コーディネーター通信 第7号

2025年3月



ツル類国内コーディネーター 松本文雄（日本ツル・コウノトリネットワーク）
〒085-0245 北海道釧路市阿寒町上阿寒25線4番2 日本ツル・コウノトリネットワーク事務局
e-mail matsumotobun@gmail.com

〇2024年度EAAFP国内連絡会が開催されました。

2025年2月25日に2024（令和6）年度東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ（EAAFP）国内連絡会が東京都で開催されました（オンライン併用）。各種群のコーディネーター、専門家、EAAFPのNGOパートナーである日本野鳥の会、WWFジャパン、日本国際湿地保全連合と環境省担当者、事務局（ラムサール日本）が参加しました。ツル類は国内コーディネーターを務める松本と専門家として金井裕氏（日本ツル・コウノトリネットワーク会長、日本野鳥の会参与）が参加しました。

連絡会では今年度の国内の活動状況のほか、渡り鳥に関する国際的な動向について環境省から報告されました。11月にフィリピンで第12回パートナー会議が開かれますが、前回のパートナー会議（2023年3月）後の取り組みや今後の動きについて話し合われました。ツル類からは今年度の国内のツルの状況や活動の取り組みなどを松本から報告し、また、最近の高病原性鳥インフルエンザの状況を金井氏が報告しました。今年は北海道、特に東部で野鳥の感染が多く、出水市のツル類の感染報告も多いそうです。家禽では集中発生する事例が多くカラスの関与が疑われています。また、世界的には北米で乳牛の感染が拡大しており、日本国内でも注意が必要という事でした。EAAFPでは鳥類疾病ワーキンググループが立ち上げられ、シンバ・チャン氏（バードライフインターナショナル東京）がコーディネーターを務め、日本から金井裕氏と森口紗千子氏（日本獣医生命科学大学）がメンバーとして加わります。活発な議論が行われ、情報共有が進むことに期待します。

会議ではNPOパートナーからの報告もあり、WWFジャパンから、モンゴルで地元の団体と協働で行っ

ているマナヅル繁殖地の保全活動の取り組みも報告されました。この報告については改めて紹介できればと思います。



講演会の様子

〇EAAFP水鳥大会開催

2025年2月28日・3月1日に佐賀県佐賀市で2024（令和6）年度EAAFP渡り性水鳥フライウェイ全国大会が開かれました。28日午後には佐賀商工ビル大会議室で講演会が開かれ、佐賀市の方の開会挨拶、EFFAP事務局長からのビデオメッセージに続き、いくつかの活動紹介・研究報告が行われました。詳しい内容は全体版のニュースレターをご参照ください。ツル類に関しては出水市クレインパークいずみの原口優子学芸員が出水市のツル保護の取り組みなどについて話されました。出水市が湿地自治体認証を受けたことで、登録湿地（出水平野）に限らず、全市的に活動ができるようになったという話はとても興味深いものでした。会場には九州各地の関係者が集まり、また、オンラインでは全国から多くの参加者がありました。

3月1日は東よか干潟^{だいじゅがらみ}（大授搦）にあるビジターセンター「ひがさす」でのエクスカーションとなりました。日本野鳥の会佐賀県支部の皆さんのガイドの



東よか干潟 遠くにノリ養殖の支柱が並んでいる。



ナベヅルのデコイ

もと、干潟で多くのシギ・チドリ類を見ました。千羽を超えるハマシギのほか、ハウロクシギやクロツラヘラサギといった希少種も見られました。前日の講演会でも報告されていましたが、有明海のシギ・チドリ類は全体的に減少傾向にあるそうです。その後、ビジターセンターの展示施設をボランティアガイドさんの案内で見学しました。2020年にオープンした施設で、展示にもいろいろ工夫がされており、勉強になりました。最後にラムサールこどもクラブ員（地元の小学生たち）の活動発表を聞きました。しっかりした発表で、貴重な干潟が地元の子供たちによって守られていくことを期待したいです。なお、時折、ナベヅル、マナヅルが降りることもあるそうで、新たなツルの越冬地としての期待もされています。センター横の畑にはツルのデコイも設置されていました。

○各地のツル類の情報

※タンチョウ標識調査

北海道では環境省保護増殖事業のひとつとしてタンチョウの標識調査が行われ、6月下旬から7月にかけて、NPO法人タンチョウ保護研究グループが22羽のヒナに標識しました。現在、250羽程度の標識タンチョウが生存していると推定され、有志による追跡調査が行われています。

※マナヅル・ナベヅルに発信器装着

昨年に引き続き、山階鳥類研究所が1月に出水市で、ナベヅル・マナヅルの標識調査を行い、ナベヅル5羽、マナヅル1羽に標識と発信器が付けられ、放鳥されました。そのうち、日本生態系協会の依頼で装着された、ナベヅル1羽、マナヅル1羽には愛称も付けられました。マナヅルは出水市立鶴荘学園のツルクラブの児童生徒が命名した「イズリア」。出水の「イズ」とシベリアの「リア」から、世界へ羽ばたく姿をイメージしたということです。ナベヅルは、新たな越冬地候補として、地元でツル誘致の取り組みを行っている長崎県五島市久賀島の市立久賀小中の児童生徒が「^{ひさづる}久鶴」と命名しました。久賀島ではツルのための環境整備を進め、同小中の児童生徒も、ツルを呼び込むための模型（デコイ）の設置や観察活動に参加しているということです（長崎新聞より）。



久賀小中の児童生徒が「久鶴」と名付けたナベヅル＝山階鳥類研究所撮影（日本生態系境界提供）：長崎新聞より

※タンチョウ保護増殖検討会開催

令和6年度タンチョウ保護増殖事業が11月1日に札幌市で開催されました。7人の検討委員のほか、地方公共団体や事業者など関係機関の担当者が出席しました。行政（環境省、北海道開発局、林野庁、北海道、釧路市、鶴居村、長沼町）の他、事業を行っている民間団体から、前年度の取り組みと今後の活動について報告されました。環境省が平成27（2015）年度から取り組んでいる給餌量削減事業に関しては、鶴居村では村独自の方針を作るために3年間据え置かれていましたが、今後について検討されました。その結果、来年（令和7年）度は前年度の1割減少した給餌量となりました。また、阿寒給餌場においても、前年度の1割減となりました。令和8年以降はその結果をみて検討するという事です。給餌量削減により、給餌場に集まるツルは抑制されていますが、その周辺に留まることが多く、期待されたような分散には至っていないようで、今後、分散に取り組みが必要という意見がありました。現在、道央や道北への生息が広がっていることから、そちらへの分散を進めていくことが検討されています。そのきっかけのひとつとして、環境書はタンチョウ再発見から100年記念事業として「タンチョウとの共生を考えるシンポジウム ～道央に舞い戻るタンチョウ～」を3月22日に開催する予定です。

また、生息状況把握のための根拠となる越冬期の生息地分散状況調査（実施者は北海道）の精度を高めることなどについても意見が出ていました。

※鶴居村でタンチョウ100年記念イベント

2024年は鶴居村キラコタンでタンチョウが再発見されてから100年にあたることから、鶴居村ではタンチョウ100年記念事業が行われてきました。2025年2月8日にタンチョウ再発見から100年記念フォーラム「タンチョウと共に生きる」が鶴居村総合センターで開催されました。

最初にタンチョウ保護に貢献してきた人・団体への表彰式が行われ、村長から感謝状が手渡されまし



記念フォーラムのパネルディスカッション

た。続いて、基調講演として俳優の杉田かおるさんがタンチョウとの思い出などを語られました（50年前にテレビドラマ「池中玄太80キロ」の撮影で訪れました）。その後、地元の幌呂中学校のタンチョウ学習の発表がありました。幌呂中学校では鶴居村でタンチョウの給餌を始めた学校で、給餌や、餌となるコーンづくりなど、タンチョウ学習に取り組んでいます。生徒たちが考えたツルを生かした村づくりなどが発表されました。二つ目の基調講演として、環境省釧路自然環境事務所の岡野所長がタンチョウの保護の歴史と現状について話されました。最後にパネルディスカッションが行われ、専門家や地元の関係者が、これからのタンチョウと鶴居村の在り方について話し合いました。保護関係者だけではなく、観光業や酪農家などからさまざまな意見が出ました。鶴居村民だけではなく、周辺市町からも参加者があり、たいへん盛況な催しとなりました。

※北海道新聞タンチョウ100年特集

北海道新聞でもタンチョウ100年記念という事で、2024年はタンチョウに関わる様々な連載や特集記事が組まれました。その集大成として30分の映像作品を公開しています。ぜひご覧ください。

<タンチョウ100年>総集編 鶴に魅せられた人びと

下記のURLからご覧ください。

<https://www.hokkaido-np.co.jp/movies/detail/6366092092112/>



←左のQRコードからでも見られます。

○高病原性鳥インフルエンザ情報

※国内の発生状況

2024年秋から2025年3月19日現在、国内において野鳥からの高病原性鳥インフルエンザ陽性確認記録は1道17県から138件ありました。ツル類ではタンチョウで2件（2羽）、ナベヅルで35件（61羽）、マナヅルで5件（5羽）でした。

タンチョウは10月末に釧路管内標茶町から、11月初めにオホーツク管内清里町から確認されました。離れた場所からの発生確認で、ガンカモ類の渡り時期でもあるため、続発が心配されましたが、その後は確認されませんでした。

ナベヅル・マナヅルはいずれも出水市内で、11月中旬から12月上旬に掛けて多く発生しました。その後、鎮静したように見えてましたが、完全に収束することはなく、1月、2月にも単発で確認されました。1月から2月にかけてねぐらの水からも陽性が検出され、継続してウイルスが存在していたことが分かります。越冬数の差（ナベヅル約12,000羽、マナヅル約3,000羽）を考慮しても、ナベヅルの発生割合が多かったです。

環境省 高病原性鳥インフルエンザに関する情報

https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/bird_flu/index.html

※世界のツルの発生状況

国内ではツル類の大発生はありませんでしたが、海外ではいくつかの事例が確認されています。

2025年1月11日インド北西部にあるラージャスターン州ジャイサルメールのルネリ池でアネハヅルの死体が見つかり、高病原性鳥インフルエンザが検出されました。その後、1月20日までに合計33羽の死亡が確認されたという事です。ただ、すべてが鳥インフルエンザが原因かどうかははっきりしていません。

出典：Down to Earth

<https://www.downtoearth.org.in/wildlife-biodiversity/in-jaisalmer-migratory-cranes-somehow-evade-power-lines-to-survive-but-now-they-face-an-invisible-enemy-h591-bird-flu>

The Times of INDIA

<https://timesofindia.indiatimes.com/city/jaipur/avian-flu-confirmed-in-cranes-found-dead-in-jaisalmer-pond/articleshow/117292790.cms>



死亡したアネハヅル（Times of India より）

2025年1月初旬にアメリカインディアナ州ジャクソン郡のカナダヅルが死亡しているのが確認され、高病原性鳥インフルエンザが検出されました。この地はカナダヅルの渡りの中継地で繁殖地のアラスカ、カナダ、シベリアへの移動途中で、北上を続けます。インディアナ州では1500羽以上のカナダヅルが死亡したと推定されていて、これより多くのカナダヅルが死亡しているという見解もあります。現地ではボランティアによる死体回収が続けられ、感染拡大を防いでいるそうです。さらに多くのカナダヅルが集まるネブラスカ州などでも注視されていますが、今のところ確認はされていません。希少種のアメリカシロヅルなどへの伝播も警戒されています。

出展：Smithsonian Magazine

<https://www.smithsonianmag.com/smart-news/more-than-1500-sandhill-cranes-killed-by-bird-flu-in-indiana-raising-concerns-among-biologists-180986151/>

お願い

このニュースレターは環境省EAAFP事業推進業務のもとで、発行され、ツル類が生息する各サイトに配布しています。皆様の各地の情報を教えていただきたいと思います。また、資料、イベントチラシなどを送っていただければ、この通信に同封して配布いたします。